寺町界隈

TERAMACHI-KAIWAI

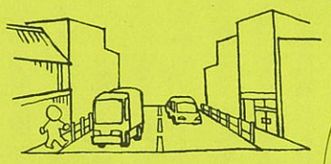
わたしたちの町の、わたしたちの情報誌。年度末合併号 ■発行／寺町のまちづくりを考える会事務局☎21-3461
■April 1996 ■Volume 15

寺町（万代町）活性化計画 [4つの柱]

4つの事業を、あくまで並行してすすめる為、全面的に協力しております。

❶ 駅通り各幅事業

朝日町交差点から常教寺さん角までの間、道幅が、現況の11mから20mへ拡がります。両側に専用歩道4.5m、車道は交差点付近に右折専用レーンを設け、二車線のままでもゆったりした設計となります。

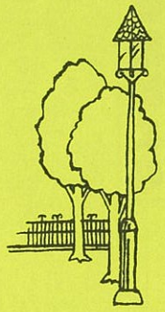


❷ 商店街活性化事業

道路拡幅に協力する代りに、商店街は3分の1になります。残った商店も大巾な切取りが前提です。墓地のむき出しの駅通りをどうするか。リアルな計算のない商店街なら、空家と墓地が続きます。法人化、核施設、細街路を使った商店街等、研究が続いてます。

❸ 街なみ環境整備事業

平成六年末、万代・北寺・南寺・和多見の四町内会長さんの御了解を取ってすすめてきました。まちづくり協定を基本に、街路や公園整備、集会所（仮称・寺町会館）、民家の修景の整備補助等がなされます。万代・北寺・南寺の三町内では、現在若手の方が、自発的に勉強会を始めたり、作ろうとされているようです。



❹ 集客核施設計画事業

現在、次の三つの案が考えられます。

Ⓐ松江やよいのリニューアル。旧大劇跡地に総合娯楽ビル。

Ⓑ松江やよいと旧大劇跡地を総合的に開発する、スポーツアミューズメントビル。（次頁に特集）

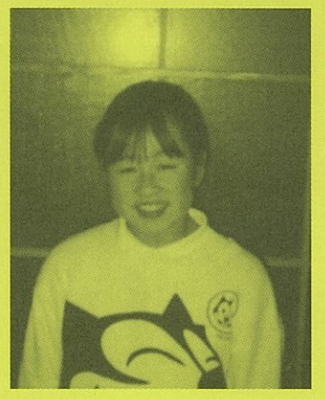
Ⓒ活性化は賛成だが、場外舟券売場に反対という方の意見。

（ⒶⒸ案も検討されているよですが、具体案が3月末日段階で事務局へ届けられておりません。届き次第特集いたします。）

未来の看板娘

小村和美ちゃん（小6）
恵ちゃん（小2）

石崎麻衣ちゃん（11才）



■「大阪寿司」
青木美稚子ちゃん（11才）

編集後記

▽まちづくりというのは、経済、文化、教育等、諸々の価値の上でなされる。勉強会を始めて3年余り。幸い、周辺の大人の方たち、諸先輩の寛容な眼差しに守られ、ここまで漕ぎ着けることができた。しかし、一部では建前や一面的な立場のみで、水を差したり、陰で動く人たちも見受けた。「総論賛成。各論反対。」一年以上経っても、対案のカケラもない反対や、合理的理由のない引延しや逃げは、地域の住民にとっては、単なる嫌がらせにしか映らない。地域の核である「松江やよい」の閉鎖を迎え、対案のない人はどうするつもりなのだろうか。数十年住み慣れた店や住居が引き倒される。我身を裂かれる思いで見守る住民たち。諸価値の上に立つ総合的判断を、今こそ政治に求めたい。それにしても、僕らの子供の頃の白潟の街は、商人特有の自由闊達な気風が横溢していたように思うのだが…。

（錦織）

▽道路拡幅という絶対問題をかかえて、私たちの活性化はスタートした。活性化というより、商店がなくなってしまうという異常な状況であった。

この街を考えて頂く時、まず『自分たちの商店がなくなってしまう』この問題を第一において頂きたい。何十年、コツコツと育てた自分の店が、家が、『公共の利益』という大義に壊されようとしている。今更この問題をどうこう言うつもりはない。自分たちの宿命と義務づけよう。しかしながら、これだけはいえる、『私たちはこの街が好きだ、そして、これからもこの街で生きていきたい。』　平成八年の春がきた。去年と同じ顔をして、四年後の春は来るのだろうか、わが『寺町界隈』に……

（尾郷）

▽今回もまた、車問題について一言。私は、27歳まで東京にいましたが、（かれこれ8年前になりますか。）松江に帰ってからめっきり歩かなくなりました。残念ながら松江が歩いて楽しい街でないのと、車の快適さを知ってしまったのが原因だと思います。当初、駅本通りの再開発のコンセプトの中に「歩ける街」という考えがありました。今でもその考えは残っていますが、車社会の現在、やはり駐車場問題は避けて通れないという気持ちが強くなっています。

しかし、やはり「歩きましょう。」「歩ける街を創りましょう。」とまた最近考えています。というのは、今、『エントロピーの法則』というのを勉強する機会がありまして、「今までの価値観でいいのか？」って考えている最中だからです。（環境問題に興味があって、まだよく知らないという方は勉強してみてください。将来に不安を感じること受け合いです。私だけが不安がっているのは不公平なので是非仲間になって下さい。ちなみに、入門書で読みやすかったのは、「現代書館／藤田祐幸・槌田敦／エントロピー FOR BEGINNERS」でした。参考まで）エントロピーを増やさないためにも車の利用を少なめにしましょう。街を車の通るための道だけで覆い尽くさず、人や自転車が通る道を増やしたいと感じています。やっぱり歩いて楽しい街でありたいですね。

（高木）

▽中海の干陸（干拓）計画について島根県としての方針が提示され、県議会も同意しました。

枕木山の中腹に住んでいる私は、朝夕なに干陸予定の中海をながめています。大山の稜線からの日の出、雲海の中の中海の景観はすばらしく日本三景以上だと思っています。

しかし景観だけでは〝人間〟生活が継続出来ません。子供や、孫達が豊かに働き、生活出来る環境作り、人々が健康に暮らせる空間作りも私達の責務だと思います。

今の私達も先人が人工的に作り上げた、都市空間の中で豊かさを享受しているのだから。

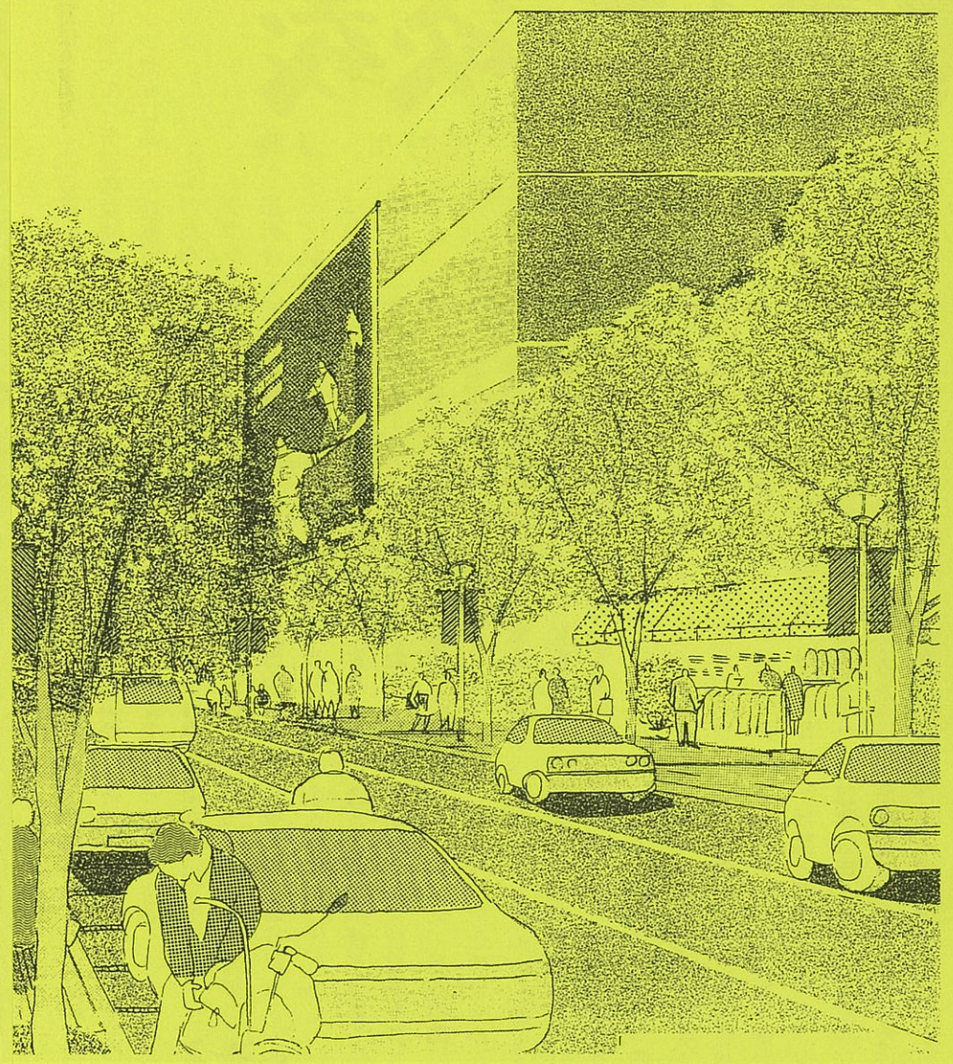
（中村）

NEWS!

寺町♪未来予想図♪

寺町まちづくり最前線リポート

宍道湖方向へ向かうサンセット大通り（現・駅本通り、やよい前付近）



◎集客核施設「北棟」。

スポーツ、アミューズメントをコンセプトにした建物です。地下1階から地上1階、中2階は、飲食店や食料品を中心にしたショッピングゾーン。2～3階は、大劇場を想わせる公営の場外舟券売場。一般席以外にホテルのロビーのような有料席も設けます。屋上は専用エレベーターで直通の、ドーム型のオールシーズンの都市型スケートリンク。「南棟」のオーロラビジョンや松江市内も展望でき、新しいデートスポットが生まれます。

◎集客核施設「南棟」。（二期工事）

低層階は、飲食店や身のまわり品のショッピングゾーン。中～上層階は立体型の駐車場。「北棟」と併せて、近隣の日常生活を支えます。壁面には山陰初の巨大カラーオーロラビジョン。スポーツ中継やイメージビデオを流し続けます。ゆったりした歩道や向いの広場からも眺められ、周辺の若者向けのお店や、私設放送局「FM寺町」、そして24時間明るい北棟の広場は、夜遅くまで若い人で賑います。

無数の電飾に包まれて、やっと松江にも都会の夜が訪れます。

私が街の中に欲しい物。　遊園地・水族館・動物園・プラネタリウム・美術館・ライブハウス・ゲームセンター・本屋・レコード屋・喫茶店・貸しビデオ・雑貨屋・輸入雑貨・アンティークショップ・ボーリング場・ビリヤード場・安くておいしい食堂・気取って食べれるレストランなど。それも選べる様にたくさんほしい。これは、私個人の好みですので皆さんそれぞれ有ると思います。街が退屈だと感じている方は欲しい施設がないから?それとも有っても自分の好みに合わないから?アウトドア指向の方には松江という街は恵まれていますが、そうでない方には少し退屈でしょう。

私は、基本的にあまり車が好きではないので、歩いて楽しい、街であってほしい。いつも編集後記に書いています。ですから私の希望はこの界隈を私の好きな物で埋め尽くして欲しいという単純な希望です。遊園地や動物園などはここでは無理ですが……。

私はもう結婚していますので、難しいのですがデートしようと思ったら、車の乗れない年齢の人達は不自由でしょうし、車を持っている人も車でのデートなら気取って食事してもお酒を飲むわけにはいかない。車中心の街はデートに不向きじゃないかなあ。若い人達はどこでデートしているんでしょうか?ということで、私は寺町が歩いて楽しい街になることを望んでいます。

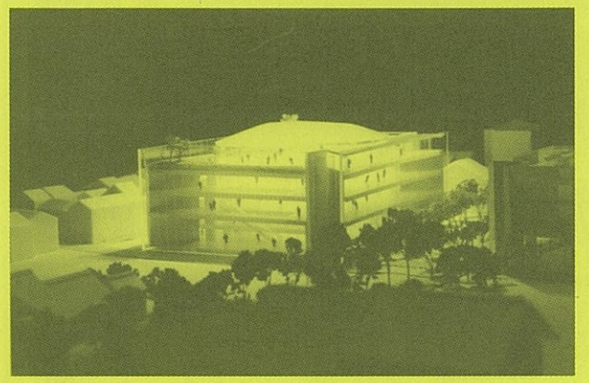
（高木）

『街』には必ず『遊』の部分が必要だ。人が一個人となって見栄や体裁を気にせずにストレスを発散できる『遊』の部分が。はたして、今の松江にはあるだろうか?そんな街に我が『寺町界隈』をそだてたい。

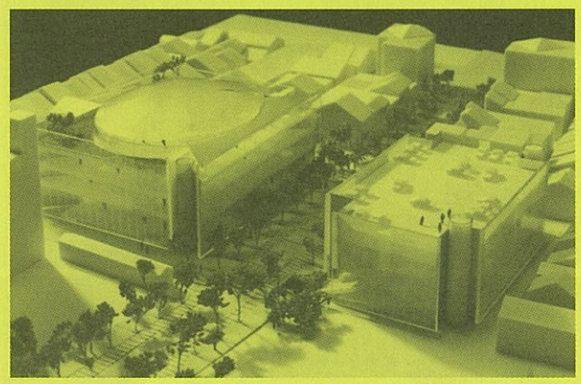
都会ではよく見かけるような場末でなく、前向きに隣と自分を主張している街。朝がはじまるとその日の躍動感がつたわってくる街。そんな松江にない、いや山陰にない『街』ができないものか。

（尾郷）

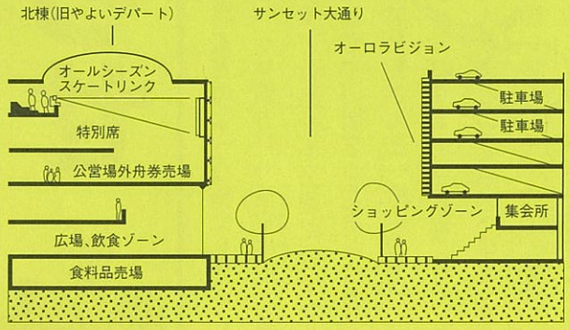
▲寺町側より望むサンセット大通り



▲集客核施設「北側」



▲集客核施設「北側（左）と「南側（右）」



▲核施設の断面図

下手の長談義

Part V　長谷川　良睦

この日はたまたま北寺町の若いもんが打ち揃って、野球の試合で今の県立プール辺りにあった松高（北高の前身）のグランドに出掛けていた。試合半ばサイレンの音かまびすしく、世の中が騒然とする雰囲気が伝わってきた。しかし、黒煙がモクモクと立ち上ぼるのが見えるが、対岸の福島造船所辺りか駅辺りかと見て取って、試合は続けていた。しかし、そのうちますます、世の中が騒がしくなり、虫が知らせたのか誰というなく止めて帰ろうということになった。

最初はガヤガヤと話しながら歩いていたが、東本町付近になると、黒煙と火の粉の方向が寺町の方に見えていく。段々急ぎ足になり、東本町を抜け新大橋の北詰に出ると間違いなく我が家の方角である。橋の中ほどから高下駄を脱いで裸足になり我が家目掛けて走り出した。下駄などどこへやら、無我夢中であった。十二間通りから稲荷通りに向かう角には、警察官が非常線を張って通せんぼ。必死の形相からか非常線を潜り抜けさせてくれたので、稲荷通りを我が家へ一目散。その時はまだ今の「おさと旅館」あたりは燃えていなかったように記憶する。走り抜けて北側の門から境内に飛び込んだ。社殿からは紅蓮の炎が舌をペロリと出すように吹き出している。社務所は煙に包まれていたが、まだ入れそうである。勇を鼓して入ってみたが、完全に煙に包まれ一寸先が見えない。結局、大の男が夏座布団三枚を持ち出したきり。情けない話である。その後、境内に消火栓があり、ホースも備えていたのでそれを使って、少しでも消火活動をと蛇口の栓を捻るが、子供のオシッコ程度の水しか出ない。当時は消防力も貧弱で、消防自動車の救けもなかったが、自衛消化も出来なかった。

境内の西側のコンクリート塀の向こうに今と同様に人家があったが、社殿からは離れているのでその時間にはまだ無疵。そのうちの一軒は貸家だったので、叔父と一緒になって、一階あたりはコンクリートの塀が防火壁となるので二階を目掛けて水を掛けようと、側にある井戸から水を汲み、その水を被って、塀に攀登ろうとするが 火事場の風はすさまじい。登っては落とされ登っては落とされであった。火事場の風はすさまじいと記したが、そのすさまじさは尋常でない。境内に最初飛び込んだ時、空からザーと音をたてて降るものがあったが、それが参道のコンクリートが火に弾け、小さな破片となって空中に上り、それが霰（あられ）みたいに空から降って来たのである。近い将来修復しようと思ってはいるが、今でも参道は当時のままで、あちこちが剥がれ、往時を偲ばせている。その他に当時を残すものとして、由緒書を吊した屋根造りのものが二つあるが、そのひとつには屋根の端に焼け焦げを見ることができ、今でも我が社のモニュメントとなっている。

さて、そうこうするうちに恩敬寺あたりの方に飛び火し結局挟み撃ちとなり、他の貸家も含め全滅となってしまった。翌朝、白々と夜が明けるにしたがって、我が家の焼け跡から宍道湖が望めるようになると大火が実感され、すべてを失った失意で無性に悲しくなったことを覚えている。

火事は恐ろしい。一夜にして無一物となる。親父はご神体を始め、お宮のことに掛かり切りであり、戦力となるべき姉も私も留守。母親ひとりが頑張ってもしれたものである。人手がない上に、火元が近く、気付いた時には自宅の外壁や本殿の背が燃えているようでは何一つ持ち出せないのも仕方がない。でも、後で聞いたことがあるが、私が夏座布団を持ってウロウロしている時には、母親は荷物を出そうと二階にあがり、窓が燃え溶ける寸前まで頑張り、ガラスが溶け始めたので布団の上に飛び下りて逃げたそうである。親父は着ていた白衣だけしか残らなかったが、母親のお陰で、私の姉弟はそれぞれ箪笥の引き出しひとつ分だけだが、夏の下着が僅かに残った。これは母親が娘時代に同じような白潟大火があり、社務所の外壁が焦げるところまでで鎮火したことを経験し、その経験が母親に火事場のクソ力を発揮させたようである。しかし、我が家にとって何よりだったのはご神体を無事遷し得、社会的責任が果たせたことである。なお、私事ばかりを記したが、当日の野球仲間はいずれも被災者となったようである。

この大火後、寺町界隈は様子を一変させた。我が家の裏口からは出雲劇場の楽屋が見え、れんじ窓越しに役者が化粧する姿をよく見たものであるが、今は劇場そのものもない。「やよい」駐車場へ通ずる神社前の道は、実はもともと手を広げた幅ほどの小路であったのを、大火後、お上から道路を作るので神社の土地と自宅の土地とを土地収用法により一部差し出せとのお達しがあり、その結果出来た道である。このことをご存知の人は少なかろう。当社は止むを得ず社殿の向きを変えて対応せざるをえなかったのである。

焼ける前は手の幅の小路であったと記したが、この小路を突き当ったところに、今と同様に常栄寺の稲荷さんがあった。左に折れるとやや広くなった通り—今の「やよい」裏の道—となり、道を挟んだ南側は、木槿（むくげ）が生け垣風に連なり、さらに南側にあった出雲劇場との間には墓地があった。今の常栄寺の稲荷さんの正面にあるガレージ辺りになろうか。横道に話が逸れたが、書きたいのは、小路を突き当って右に向かって直ぐのところ、今の「椰子の実」前から「やよい」の搬入口前にかけての辺りにも墓地があり、そこに「雷電為右衛門」の墓があったことである。

これも知る人はほとんどいないだろう。そこらは自宅の南側で、窓越しにいつも見ていた墓地であったが、私もそのことを永らく知らなかった。戦後樺太から引揚げて来た祖父の弟にあたるじいさんに教わり、石塔に彫られた「雷電為右衛門」の文字を実際に手で触れたように記憶している。その場所が道路になった時、「雷電為右衛門」の墓はどうなったのか気掛かりである。

記憶の回路の流れがだんだんと滞り出した。でも、面白いことにひとつの記憶が次の記憶を呼び覚ますようである。これを執筆する機会を得て、お蔭で埋もれていたことを随分と思い出した。最初話題に心配をしていたが、豈（あに）はからんや、あれもこれもと記憶が湧き出し、やや整理に困る程であった。とはいってもそれはやはり断片だったり、不確かなことだったりで、記憶の回路の悪さをあらためて実感させられる。それに、昔見聞した自分の思い出を得々と語っても他人様には詮ないことだから、この辺りで一区切りつけることにしたい。この下手の長談義が皆さんの思い出づくりのキッカケになれば幸いである。

少年時代の寺町界隈、今の寺町界隈、それなりに変化を来したが、騒々しいから、日当りが悪いからといってお宮を担いで引っ越すわけに行かず、ここをついの住処（すみか）とする私にとっては、難しくいえばアイデンティティに関わるものとして寺町界隈とここに暮らす人々を大切にしたいと思っている。

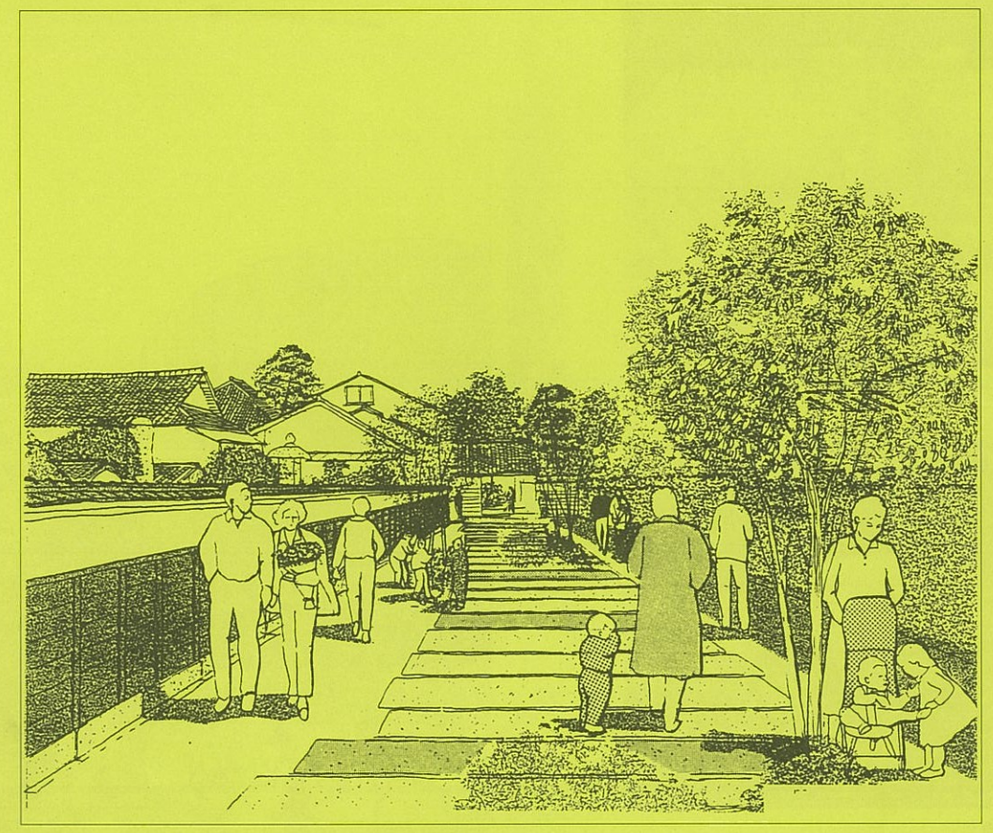
編集部より

永い間、ご愛読いただき、誠に有難うございました。「下手の長談義」は、今回を以て終了いたします。読者の皆様に、改めてお礼申します。

また、長期間に渡り御執筆いただきました長谷川良睦先生にも、大変感謝いたしております。公の記録ではうかがえない当時の事実や雰囲気を、名文で追体験させていただきました。それだけでなく、素人仕事の弊紙の出来上がりを、内容の面で、格段に引き締めて下さいました。

今後も、機会がございましたら、再びの御無理をお願いすることもあろうかと存じます。紙面を借りて、お礼とお願いをいたします。

松江市からのお知らせ



春陽の候、寺町界隈の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。また、日頃は当市の都市計画行政に対し格別のご配慮を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、寺町のまちづくりは、平成4年度の終わり頃から、駅前通りの拡幅問題に関連し地元商店会の若手有志により始められました。その後、平成6年度には万代町だけでなく、もっと広い範囲で考えないとまちづくりの効果がないということで、寺町のまちづくりを考える会を発足なさいました。

市では、都市計画課をこの寺町のまちづくりを考える会の一員に加えていただき、6年度と7年度の2ヵ年にわたり補助金交付による支援をさせていただいてきたところです。

8年度は、寺町界隈全域（約10ha）を将来どのような街にしていくかという整備方針の策定に取り組みます。道路や小公園だけでなく、住みやすい街をつくるためのアイデアを皆さんと一緒に考えたいと思っております。今後、町内会長さんを通じて委員会への参加等をお願いいたしますので、是非、積極的にご参加下さいますようお願い申し上げます。

なお、「寺街界隈」につきましては、今後、駅本通りの商店会の皆さんが商店会費を使って発行を継続して下さるとのことです。

松江市都市計画課長 福井　勝美

お礼とお知らせ

御愛読ありがとうございました。補助金による機関誌の発行は、本号をもちまして終了いたします。次号からは、一年振りに、自主財源のみによる発行となり、部数も大巾に縮小させていただきます。配付から回覧へと移る地域も出てくるかと存じますが、ご了承下さい。（事務局）

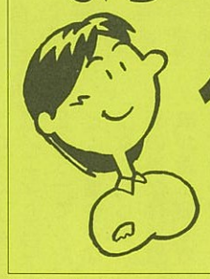
寺町写真館

白潟大火

一九四九年（昭和二四）八月十五日

写真提供／山陰中央新報社

まちづくりは、人づくり



木村 順子さん
（嫁島町）

「まちづくりは人づくりから」。どんな仕掛けがあれば、人がまちに関心をもつようになるのか。松江のまちを守り育てるようなことが何かできれば…。学生の頃はのんきなことを考えて過ごしていました。Uターンしてきて十カ月が経ちましたが、正直言って、ただ毎日の生活をこなしているだけです。自分自身に余裕や安定した場ができないと周囲に対して積極的に目が向かない。でも生活してるとまちの気になるところが見つかる。何か行動したいけど、何をしたいのか、どこから手をつけたらいいのかアイディアが浮かばず、かと言っていい加減なことはできないし、一緒にやれる仲間もまだ見つかってないと悩む。うだうだ考えるのがいやになり、まちづくりという言葉に拒否反応を起こし、少々逃避気味でした。

そんな状態でしたが、去年の九月の松本市視察に参加しました。中町は蔵の上手な利用によって外観と中の雰囲気とのギャップがお洒落な店があちこちに見られ、落ち着いた町並みはじっくり歩くとよいところです。この中町に"はかりの資料館"という、昔の商家を再利用した建物がありました。中の雰囲気を知りたくてちょっと覗いたところをそこの館長さんに呼び止められ（ヒマだったのでしょうか?）、マンツーマンで分かりやすく、アカデミックで楽しい解説を受けながら見学しました。また、私の祖母が松本の出身という事から会話が弾み、この時以来館長さんから手紙をいただきます。手紙には、「松江と松本は松平家の時代からつながりがあり、縁があるのだろう。他人事には思えないし、二つのまちが共によいまちになるように我々自身が意識し行動していきたいね」ということが常々書いてあります。遠いまちから松江を見守ってくれる人がいるというのは嬉しいことです。また、館長さんとの出会いをきっかけに、私自身が松本を以前より意識し始めたように、まちを愛する魅力的な人がいて、出会う機会と場があれば、人はまちに対して関心や愛着をもち始めるのでは、ということを実感しました。

まちには多様な価値観をもった人がたくさんいて、きれい事だけでは済まされない事がたくさんあり、私もそれは十分わかっています。しかしそればかりにとらわれていては何も出来ないのです。もっと明るく肩の力を抜いてどうせなら楽しくまちを考えていきたいと思います。

松江にも人と人とが出会いまちについて考える機会と場がたくさんできれば…、自分もそのきっかけづくりを考えていけたら…と、やっと今頃まちづくりへの逃避思考が薄らいできたところです。

（平成七年　松本市視察メンバー）